

＜今日の説教のポイント ルカによる福音書7章36～50節＞

1 女もファリサイ人もイエス様を知っていたが、その違いは大きい。

ファリサイ人はイエス様を招待し、罪深い女はイエス様の所にやって来たのですから、どちらもイエス様のことをある程度知っていたのです。では、イエス様のことをどのように思っていたのでしょうか？ ファリサイ人は聖書の専門家ですから、イエス様の聖書についての知識の深さに驚き、それなりの尊敬心を持って家に招いたのでしょう。しかし、罪深い女は自分のように罪深くてその罪を赦して受け入れて下さるお方だと確信し、その感動がこのような行為を生んだのです。

2 罪深い女の「罪」とは？

「罪深い女」という表現は、考えてみれば、私たち日本人はあまり使わない表現です。この場合の「罪深い」とは、旧約の律法の教えに従えば不浄であるで娼婦を女が生業としていたことを指すと考えられます。だとすると、ファリサイ人にとってはこのような場に入って来た女も、それを赦すイエス様も共に律法を犯していることになるのです。

3 イエス様に見るべきもの 借金（負債、罪）の帳消し=罪の赦し

イエス様の例え話はイエス様が慈悲に満ちたお方であることを示すだけのものではありません。イエスは女に、「あなたの罪は赦された」と言われ(48)、同席した人々が言っているように、神様だけができる罪の赦しを宣言し(49)、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」(50)とまで言われているのです。これはイエス様は神が遣わされた方であるという以上に、神ご自身であると考えさせられる内容ではないでしょうか！ 実際、その後の出来事（十字架の死と復活）がそのことをはっきり示したのです。それは、まさに神様が私たち人間の罪を一方向的に赦して下さること、すなわち「借金の帳消し」(42-43)の出来事だったのです。

罪の赦しを告げられた女の喜びの大きさを思います。しかし、娼婦であった女の罪は大きく、ファリサイ人の罪は小さいではありません。神の前には誰の罪も絶望的に大きいのです。しかし、その罪を赦して下さる神なのです。女のしたことは私たちがすべきことでもあるのです。